



ハレノヒ

大田区立松仙小学校
令和5年12月1日(金)
裏研究推進だより第10号
研究推進担当

体育話題提供授業 協議会記録 授業者

成果

課題&疑問

導入

展開

終末

◎準備運動、補助運動

- ・タオルを使った補助運動が主運動へつながる動きになっていた。音楽が効果的。

◎チーム編成

- ・メンバーを5人にし、参加人数を1チーム4人にすることで、ゲームに参加しない子供が外から客観的にゲームを見てメンバーにアドバイスすることができた。

◎ルールの工夫

- ・ボーナス得点があることで運動が得意な子供も不得意な子供も、積極的に活動に取り組んでいた。

◎ロードマップ

- ・単元の始めからの成長が見える化されていることで、子供が自分の成長を知り主体的に学習に取り組むきっかけになっていた。

◎場の工夫

- ・コートのがさがちょうど良く、運動量の確保につながっていた。

◎めあての設定

- ・チームの願いと個人の思いが叶うようにするためには、どのようなめあての設定の仕方がいいのか。

◎教師の声掛け

- ・教師はどこまで子供たちに声掛けをしていくのか。

◎チームタイム

- ・チームタイムで相手を意識して作戦を考えることができていたチームと、そうでないチームがあったため、途中のチームタイムの前に全体で作戦を立てる視点を与えてもよいのではないか。

<授業者自評>

- ・ロードマップの活用など子供たちの変容が見られ、よかった。
- ・ゲームのルールを決めたり、練習カードやホワイトボードの活用したりする取り組みは、下の学年からの積み重ねていくことが必要である。

☆「勉強になった！」ポイント☆

ルールの工夫をしたり、教師も子供と一緒にゲームを盛り上げたりすることで、運動の得意不得意に関わらず子供たちが積極的に取り組んでいた。教師は子供たち全員が、意欲的に運動に取り組めるような工夫を第一に考え、授業づくりをしていくことが大切である。

指導・講評

よかったところ

☆教師の子どもへの関わり

子供たちへの指示が明確で分かりやすかった。また、タイムリーに子供たちに関わり、肯定的な声掛けをすることで、子供の意欲につながっていた。

☆対抗戦

リーグ戦ではなく対抗戦にしたことで、チームの作戦が生きる可能性が高くなる。相手チームを考えて作戦を立てることができていた。

☆運動の特性

「シュートを決めて楽しい!」、「どちらが勝つか最後までわからない。」という運動の特性に子供たちは浸ることができていた。

今後に向けて

★補助運動の工夫

チームでゴール2人、シュート2人という練習をしていたが、補助運動でも子供たちがドキドキ感を持って取り組めるような工夫があるとよい。

★次の学習につなげる工夫

チームによって思いがそれぞれあったため、どこを単元の落としどころにするのか。単元ごとだけではなく、系統立てて指導していくことが必要。

キラリと光る付箋

<ルールの工夫>

- ・全員が得点するとボーナス5点があることで、点を入れていない子にパスしようとしていた。
- ・子供たちとルールを作っていることが、個人のやる気につながっていた。

<チームタイム>

- ・赤で、有効に使えていた。→うまくできていないチームへの声掛けや見通しがあるとよい。

<円陣くん>

- ・自然と話し合う環境になっていた。→教師の見取りが(一度開かないといけないので)手間(6年)

<ロードマップ>

- ・チームでどのように動けば、ゴールにつながるか、を共有していた。

<教師の声かけ>

- ・先生の後押しが本人のチャレンジにつながり、成功のチャンスを生んだ。

<友達の声かけ>

- ・チーム内の熱くなっている友達に、「落ち着け。」「得点気にするな。」の声掛けがよかった。パスを出す方向を指で指示を出している。

<練習カード>

- ・チームの願いと個人の願いの関係は

今回の授業を通して、児童が自らのチームや相手のチームの特徴をとらえることで、初めて具体的な練習方法や作戦などが出てくると思った。チームタイムの効果的な使い方については、教師がその活動を価値付けしていきながら、児童に身に付けさせていく必要があると感じた。例えば、対抗戦1試合目の終わりに集めて「次はどうしたら勝てる?(次も勝つためにはどうする?)」といった発問を投げかけたり、練習方法を工夫しているチームを全体に伝えたりすることがよいのではないだろうか。児童が主体的に運動するためにはどうしたらよいのか、改めて考えさせられた。